

私が「仲良しを作るお菓子屋」の社長に就いて7年になりました。元々は祖父が会津坂下町の裏通りでお菓子を作っていました。その姿を見ていた父が、いつか表通りに店を出し親孝行したい、会津で日本を代表するお菓子屋を目指そうと「太郎庵」という屋号にしました。まだ誰も知らぬ店の夢物語です。

私が社長になる前、父に居酒屋で聞いてみました。「社長を引き継ぐにあたり、残してほしい価値はある?」。返答は「私たちは 命に優しい 心ときめくお菓子を通して 会津の風土を描き お客さまとともに やすらぎと温もりのある 幸せ文化を創造します」という太郎庵宣言と呼んでいる経営理念を想定していました。

「ランプの心」

太郎庵の象徴であるランプには、私たちの思いが静かに宿っています。お菓子を通して会津

民 報 サ ロ ン

目黒 徳幸



を良くしたいという「情熱」と、お客さまの心に温もりを届けたという「温もり」が込められています。強い光で遠くを照らすのではなく、そばにいる人の足元だけを柔らかく照らす小さな明かり。それが私たちが大切にしてきたランプの心です。

寒い夜には、凍えた両手をそっと温めてくれる明かりです。迷う夜道では、進むべき道を静す。風が吹けば炎は揺れ、弱々

ランプの心

く温かさの象徴でもあります。炎の周りには自然と人が集い、そこに輪が生まれます。太郎庵が目指す「お客さま・社員・社会が仲良くなる世界」は、この延長線上にあります。争うのではなく、そっと照らし合いながら生きます。そんな関係が地域に広がれば、会津の未来はきっと優しいものになると信じます。

かに示してくれる明かりとなります。その光は決して派手ではありませんが、人のそばに寄り添い、前へ進む力を与えてくれます。私たちのお菓子も、そんな存在でありたいと願っています。太郎庵の掛け紙には「懐かしい 会津の山河 思い出に添えしまごころ」とあります。会津は歴史の中で多くの逆境に耐え、支え合ってきた地域で

しく見える瞬間もあります。それでも、芯の火が消えない限り、再び明るく燃え上がります。創業から今日まで新しい挑戦を続けてこられたのは、情熱の火が絶えず燃えていたからです。どれほどの逆風が吹こうとも、情熱を失わなければ道は開けます。私たちはその信念を胸にこれからも歩んでいきます。そしてランプは人と人をつな

ランプの心とは、ただ光をともすことではありません。人に寄り添い、地域を照らし、情熱を燃やし続け、つながりの輪を育てる心。太郎庵宣言の「幸せ文化の創造」はまさにこの思いと重なり、小さな明かりでも、絶やさずにともせば、誰かの心の奥に届く光になります。今日もまた店にランプがともります。私たちもその明かりのようでありたいと思いながら、お菓子を作り続けます。(会津坂下町字館ノ内甲、太郎庵社長)